

## 「グローバルヘルスってなんなんだ!」を開催

グローバルヘルスはもはや常識となる?

2015年10月21日、製薬協の会議室にて製薬協会会員会社など70余名が参加し、国際委員会主催セミナー「グローバルヘルスってなんなんだ!」を開催しました。業界の重要テーマの1つである“グローバルヘルス”について討議が行われました。本セミナーは製薬協会会員会社のなかでグローバルヘルスに少なからず興味・関心をもつ方々が、これまで漠然としていたグローバルヘルスへのイメージを大きく膨らませ、少しでもはっきりとした輪郭をもてるような機会にすること、そして今後、各企業でグローバルヘルスにかかわる活動を担える人材の育成のきっかけとなることを目的として企画されたものです。以下に、当日のセミナーの様子を紹介します。



セッションの様子

### 1. グローバルヘルスと人材育成 [平手晴彦 国際委員会 委員長 挨拶]

グローバルヘルスという単語はカタカナの表記になっています。日本語で表現できれば理解がより深まるのですが、よい日本語訳がなかなか見つからなく、直訳すると「国際保健」となりますでしょうか。しかし、この言葉もニュアンスが違う印象でしっくりきません。このこと1つをとってもグローバルヘルスに対する理解にまだバラつきがあることを示しています。グローバルヘルスはこの業界に身を置くものとして、知識として必須のものです。私は国際委員会の活動を「国際協調」、「国際展開」、「国際貢献」の3つの側面で見ますが、3つの部会のうちグローバルヘルス部会は「国際貢献」を具体的に表現する任務をもったチームです。ところで国としての日本はというと「国際貢献」は上手ではない、やったことに見合った評価を十分に得られていないというのが率直な感想です。これは日本の文化に起因するのか、極めてアピール下手だったといえるでしょう。アピールも踏まえて日本がどういう貢献をすればよいか、これからはモノの支援もあるがヒトが鍵を握っていると考えます。人材育成は“将来”につながるものであり、日本らしさを発揮できる方法論だと思えます。支援相手国の“将来”の発展に真に寄与するような貢献を考えるべきでしょう。最近では日本も変わりつつあると感じています。阪神・淡路大震災や東日本大震災後にはボランティアが多く支援に駆けつけました。日本にもボランティアの文化が根づきつつあります。日本も成熟しグローバルに踏み出す段階にきていると実感しています。もちろん「国際貢献」は簡単ではありません。ビジネスを全面的に意識したら難しく、一般的な寄付と捉えると持続性に欠けるリスクがあります。まずは各国の人々の“将来”に視線を向けることだと考えます。そのために、会員会社一社一社の情報共有と全体としてのチームワーク作りに併せて取り組んでいきたいと思えます。

## 2. グローバルヘルスってなんなんだ! に対する答えとは? [第1セッション: 背景編]

本セミナーの主題である「グローバルヘルスってなんなんだ!」に対するチームの答えは第1セッションで早速明らかにされました。それは「グローバルヘルスはもはや常識となる」というものです。チームがそう考えるに至った背景や根拠を、パンデミックの脅威(先進国にもおよぶ感染症の脅威)、ミレニアム開発目標(保健分野への高まる注目)、発展途上国の非感染性疾患(Non-Communicable Diseases、NCDs)(感染症との二重の負荷)、そして日本政府のグローバルヘルスへの取り組み(感染症対策からユニバーサルヘルスカバレッジまで)などを例として取り上げながら解説しました。近い将来に「グローバルヘルスが常識となる時代」が到来するであろうことを参加者から共鳴を得られたのか、参加者の声をいくつか紹介します。

### 参加者の声:

- ・グローバルヘルスに係る業務に従事している者以外は認識が薄いので大変心強い見解だった。危機感をあおるメッセージで大変良い。時間はかかるが確実に流れはある。
- ・グローバルヘルスは余力のある会社が取り組むものというイメージだったので新鮮な驚きを感じた。最初はピンとこなかったがセミナーに参加し非常に重要なことだと認識した。
- ・世間は製薬業界がグローバルヘルスに積極的な貢献をしているイメージは必ずしももっていない。社会への貢献が大切だと考え直した。
- ・新興国を含む医療や世界の患者さんのことを包括的に考えることが必要と感じた。先進国と途上国の格差是正という表現ではしっくりこないが、国境を越えてまるごと対策を講じていく、というフレーズはしっくりきた。途上国支援にとどまらず、全地球規模で考えていくことと納得がいった。
- ・誰がグローバルヘルスを推進する主体となるべきなのか? そのなかで製薬企業はどのような役割を担うべきか? グローバルヘルスの推進にはリーダーシップが重要と理解した。
- ・グローバルヘルスへの貢献は資金が足りさえすればうまくいくものではなく、人の面も鍵となる。人材育成は重要な課題である。
- ・日本にも大きな風を起こすべく働きかける必要性を強く感じた。常識とするために業界に求められる変化がなにか知りたい。
- ・製薬協はどういう方向に向かっているのか? 具体的な活動は結局、個々の企業ベースなのか? 各社足並みをそろえての実行策を選ぶのは難しいが、一方で、啓発活動や業界貢献のアピール、国際製薬団体連合会(International Federation of Pharmaceutical Manufacturers & Associations、IFPMA)などとの連携は製薬協の重要な役割である。

## 3. では私たちはどのようにグローバルヘルスにアプローチをしたらよいのでしょうか?

### [第2セッション: アプローチ編]

グローバルヘルスにかかわる活動の入り口はどこにあり、どのように活動していくか? 第2セッションでは「社員」の動きに焦点を当てて考察するためにチームメンバーが自らの体験をもとに、トップダウンの方針で具体的案件の社内展開を指示されたケースと、案件を動かすために組織のなかで暗中模索するケースの2つのパターンを紹介しました。そのうえで参加者も体験したであろうシーンの「あるある感」を共有し、直面するグローバルヘルスに係る課題への解決のヒントを模索しました。

### 参加者の声:

- ・会社としてのグローバルヘルスへの取り組みのアピールは必要であるし、こうした活動は積極的に対外的に公表していくのがよいと思う。
- ・従業員の誇りを鼓舞する材料としてもグローバルヘルスに係る活動に関する社内向けの情報発信と社外向けのリリースを行い、よい企業で働いているという実感を共有することも大切である。アメリカでは社会貢献活動が就職先の選択にもアピールする状況も生まれている。
- ・受益者のことなども考えれば、企業の業績などの状況に左右されない、活動の持続性をどう担保するかも考えていかなければならない。一方で企業は投資家の視線も意識しないとイケない。そのためには自分たちなりのストーリーをもつ必要がある。レピュテーションの問題も意識する必要がある。たとえば企業の業績報告では計数部分はむしろページが少なく

定性的な部分が厚みを増している。

- 途上国におけるグローバルヘルスは経済的価値、社会的価値の2つの価値の側面から考えていく必要がある。事業をみる組織がかかわっているのが理想である。
- ヨーロッパ・アメリカの大手企業に比べ相対的に規模の小さい日本企業としては、ヨーロッパ・アメリカのベンチャー企業がどんなことをやっているかを見ると、規模が小さくてもしっかりフィロソフィーをもってやっている例があり大変参考になる。

#### 4. グローバル企業はどんな取り組みをしているのでしょうか？ 日本の企業の事例から学ぶ。

##### 【第3セッション：展開編】

製薬企業はグローバルヘルスにどのように貢献できるでしょうか？ スケールの大きな課題に対して個社でできることには限界があります。グローバルヘルスには多種多様なステークホルダーがかかわっており、彼らとのパートナーシップが鍵を握っています。このセッションではパートナーシップの事例を紹介し、グローバル企業の具体的な活動の概要を探るとともに、日本の製薬企業の取り組みとしてアステラス製薬とエーザイの事例を取り上げグローバルヘルスが常識となっていく時代の製薬企業のあり方を考察しました。この2社の事例では背景や経緯、最大の難関や対応策、得られた成果や今後の展開について解説があり、プロジェクトにかかわる多くのステークホルダーとの調整の難しさ、社内においてもトップの理解やコーポレートと現場の連携、関連するバリューチェーンの全部門が自身のことと捉える当事者意識をもつことの重要性が浮き彫りになりました。

##### 参加者の声：

- 短期の事業にこだわらずに実行されていることが大切だと思う。紹介された事例はそもそも実際に実行していること自体が素晴らしい。日本の2社の事例は先駆的と感心した。たゆまぬ努力に感銘を受けた。苦勞も多いと推察するがグローバルヘルスに踏み出したことで得られるメリットがあるはずだ。
- プロジェクトにはリーダーシップが大切、トップの想いが伝わってきた。製薬企業にはそもそも社会貢献マインドの高い従業員が多いと思う。こうした従業員の純粋な想いへ訴えかけることも大切と感じた。現地の従業員が誇りをもって取り組んでいるということに興味深く感じた。

#### 5. グローバルヘルスへの貢献、国連からG7へ [佐々木 小夜子 グローバルヘルス部会長]

グローバルヘルスは現在の医薬品ビジネスの課題をまさに映し出しています。世界の健康への貢献、医薬品アクセスの課題、医薬品の価格のあり方、そしてこれらが製薬産業のレピュテーションの課題につながっていると思います。少し乱暴ですが、結論すると今後の製薬企業にとって、「グローバルヘルスは常識になるのか?」という段階からさらに進んで「グローバルヘルスはやって当たり前のこと」になりつつあるのではないのでしょうか。日本の製薬企業は世界有数の創薬力を誇っています。これを楽しむのは先進国の患者さんだけでよいわけがありません。新薬を創ることを通して地球全体の人を見つめ、顧みられない人々を顧みる、そしてどのように貢献していくかを考え続け一歩踏み出し実践していくことが、力強い創薬力をもつ私たちに課された命題であろうと思います。グローバルヘルスへの取り組みというのは、one-timeあるいは短期間の支援で成し遂げられるものではなく、企業活動のなかでどのように位置づけて取り組むべきか、ということをもっと考える必要があるかと思っています。また、持続可能な貢献の方法を模索するうえで、官民パートナーシップが鍵となります。本日の議論にもありましたが、グローバルヘルスという課題は多くの要素を含んでいるため製薬企業だけで解決できません。産学官が連携してゴールを共有しながら各々の得意分野を活かして役割分担し、達成していくことが重要です。

2016年5月日本開催のG7伊勢志摩サミットでは昨年のドイツ・エルマウサミットに続いてグローバルヘルスが1つの議題になると見通しています。ドイツでは感染症への対応が大きな議論の1つでしたが、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ先進国の日本からは、感染症のみならず、NCDsやUHCを含むヘルスケアへのアクセス改善について、次の目標・対策がアジェンダとして提起されるものと予想しています。保健分野ならびに日本に注目が集まるこの貴重な機会を捉え、製薬協としてもグローバルヘルス部会にG7対応タスクフォースを立ち上げ具体的な対応を考えていきます。

## 6. 今後に向けて

今回セミナーに参加し、「社内で啓発から行いたい」、「グローバルヘルスを意識して日常業務に取り組みたい」という前向きな声を多くいただきました。一方で、意識は高まり、取り組みたい気持ちはあるものの、「社内ではすぐ取り組める状態でない」、「もう少し時間がほしい」という悩みの声も多くあり、「業界としての取り組みを真剣に考えてほしい」、「日本国として貢献できる分野を見定めて政府や業界団体が音頭を取ってほしい」といった製薬協への期待の声もありました。グローバルヘルス部会では今後も引き続きこうしたセミナーを企画していくとともに、いただいた皆さんの声も参考にして、個社ではなく製薬協だから取り組めることを、パートナーシップ(官民連携)をキーワードとして関係省庁との意見交換も行いながら考えていきたいと思えます。



セッションの様子

(国際委員会 グローバルヘルス部会 医薬品アクセスグループリーダー 吉田 力)